



青木 十九郎
重森 恒雄 選
峯 裕見子

特選 しあわせと花見だんごの3本入り

松原町 川村 美栄子

(評) 一読、コンビニで買ったような、透명한バック入りの花見だんごを想像した。ごく普通の、ありきたりの暮らしの中の一場面ながら、今年も桜を見られた。これが幸せでなくて何であろう。

(裕見子)

入選 窓を描き何度もしてる深呼吸

平田町 竹内 歌子

(評) 実際には窓は無いのである。作者の閉塞感を感じるが、それに押しつぶされまいとして空想の「窓」を開けて何度も息を吸う。負けてしまうわけにはいかない。

(裕見子)

入選 丁度良い丁度いいねと生きている

須越町 島 田 洋子

(評) 吾唯足るを知る、そんな言葉を思い出させる。満ち足りた毎日を過ごされている様子に感服するばかり。仲の良いお二人がちよつと薄いお茶をおいしく飲んでおられるのだろう。そんな光景がまた何とも言えず、ちよつど良い。

(恒雄)

特選 父さんと迷子になろう風薫る

地藏町 大谷 のり子

(評) 息子よ、父さんと夢中になつて遊ぼう。気がつけば、ここは何処だという辺りにまで行つてみよう。初夏の風がさわやかに吹いているじゃないか、という父の夢。迷子になろうが意表を突く言葉でありながら、これしかなかく、効いている。

(恒雄)

入選 アンドロイド恐ろしくなるこの星が

愛知郡愛荘町 青木 郁子

(評) これからはAI(人工知能)の時代だともいわれている。アンドロイド(空想科学小説や映画などにも登場する、人間そっくりのロボット)が、現実の世界で案内、接客、その他を行っている。作者は、その暴走を危惧しているのである。

(十九郎)

特選 絶妙な距離にお日さまいらっしやる

東近江市 河崎 章

(評) 宇宙の神秘について考えさせられる作品である。宇宙の中の太陽系の惑星の中で、生命体の存在が確認されているのは、地球だけである。それは、太陽と地球との「絶妙な距離」のおかげなのである。(以下総評参照)

(十九郎)

入選 ひらがなを喜ぶひとのそばに居る

堀 町 河分 武士

(評) 子どもや高齢の人、そうかもしれない。しかし、それよりも、ひらがなの平明さ、優しさを良しとする「ひと」であるように思える。短冊や色紙の書を見ている二人であるような。

(裕見子)

入選 背もたれがしっくりこない無線ラン

犬上郡甲良町 川口利江

(評) パソコンに向かってメールの返事でも打っているのか。良い言葉が見つからず、ううっと背伸びをするが背もたれもどうもなじまない。「しっくりこない」は背もたれにも無線ランにもかかっていて、しっくり納まっている。(恒雄)

佳作 よく噛んでみるとわたしが分かります

近江八幡市 浅野忍

佳作 幸せは気付けばここにあそこにも

鳥居本町 谷口繁子

入選 新元号新の鉛筆用意する

大津市 的場功巳

(評) 元号法(元号は政令で定め、皇位の継承があつた場合に限り改める)により、元号が平成から令和に改められた。これを契機に、今までの暮らしや仕事の流れを見直し、これからの時代に向かおうという意気込みがある。(十九郎)

佳作 お茶リュック鳥やら雲になりに行く

大津市 松延博子

佳作 喜寿越えておひとりさまの春愛でる

大藪町 小南苑子

佳作 春彼岸集う裾野に里なまり

清崎町 柳本和子

佳作 スマホなど無くても一日生きている

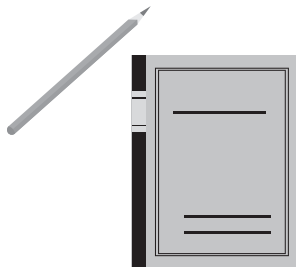
外町 筑田弘正

佳作 入院の一週間が春を呼ぶ

鳥居本町 北川夏子

佳作 ばあちゃんの笑顔つつんで帰ります

八坂町 山本はるか



佳作 思い出の通勤鞆に何入れよ

大藪町 清水慶昭

佳作 ふりむいたお日様そっとラップする

大藪町 大塚しのぶ

佳作 昨日より若くなりたい万歩計

鳥居本町 寺村美恵

佳作 病む友に思い出話ありったけ

東近江市 知野見松子

佳作 じいちゃんと呼ぶ孫ぎゅっと抱きしめる

清崎町 辻哲雄

佳作 傍にいるただそれだけで心満ち

京町二丁目 川辺由子

佳作 指切りをしたあの頃の細い指

西沼波町 外海芳子

佳作 ふりむけば風に吹かれて咲いている

正法寺町 金子君子

佳作 入園式スキップで来る三歳児

東近江市 小林清次郎

佳作 寄り添うてやがて消え行く月夜です

稲里町 覇流 不良者

佳作 まな板の春が弾んでトントントン

新海浜二丁目 森口ゆめみ

佳作 庇いあう夫婦になって茶が旨い

米原市 西尾辰之



《総評》

特選第三句（評）の補足

今から約四十六億年前に決まった一億五〇〇〇万kmという太陽と地球との偶然的な位置関係が、適度のエネルギーを地球に与え、地球上に多くの生命と豊かな自然をもたらしている。生命を育む太陽の光と熱は、約八分二十秒で地球に届いている。「宇宙のドラマ」教育社

漢字について

文芸作品に用いる漢字は、常用漢字表や国語辞典（紙に印刷されたもの）に載っているものをお勧めする。最近では、電子辞書でも国語辞典と同じ字体、例えば、嚙む、摺む、蟬などとしてあるものがある。また、歳を才、幅を巾などと書かないでほしい。

作品について

今回の入賞作品は、おおかた明るい内容のものが選ばれた。しかし、内容は明るいものに限らず作者の自由である。次回には、深い悩みの中から得られた、人生を考えさせられるような内容の作品もあつてほしい。

青木 十九郎

川柳部門への投句者数が昨年よりも三名減りました。減つたのは川柳部門だけだったようです。が、佳句は増えました。私には選びたい句がまだまだ残っていて最後の一句を迷いました。

川柳は結局は人を詠む、自分を詠むことです。そして感情は喜怒哀楽しかなくて、言葉は十七音しかないので。みんな同じような句を作ります。その中で、佳句というのはどうしたら生まれるのか、難しいものです。テクニクに溺れるのも良くないことです。

滑稽、皮肉、軽妙の三要素は忘れてはいけないと思います。こういうものの味がどこかにないと面白い句にはならないし、それが強すぎるとイヤな句になります。何かしらにたにたしながら読んでい

る句が良さそうです。作者が真顔なほどユーモアが漂うものです。

そんな句を今回は選ぶことができ、楽しく選を行なえました。

今後も、何気ない一言に潜むウィットを追求してゆきたいと思っています。来年もまたよろしくお願い致します。

重森 恒雄

川柳部門では一六七句の応募がありました。応募してくださいました皆さんの作品の一句一句を三人の選者が真摯に選考をしました。総体的には、暮らしの中から生まれた体温の感じられる作品が多く、これは例年のことではありますが、中には自身の心の辛さや悩みを袋の口をほどくように書かれた作品もあり、これも文芸の本質であろうと感じられました。川柳が「おとなの文芸」とか「中高年の短詩形」と言われるように、人生の経験を積んだ人だからこそ書ける世界があるのだと思います。実感から生まれたであろうキラリと光る一句を見逃さないようにしたいと思います。

次回の応募にあたって、表記については細心の注意が必要です。いつも書いている文字だからと、辞書も引かずに書いて提出をしてしまわないでください。誤字や略字、正確ではない送り仮名や間違つた言い回しを使った作品の入選は、当然ながら難しくなります。

言葉を用いて表現する者として、

（一般に使用されていても、他者を傷つける言葉を使わない）

（便利な川柳の常套語や演歌の歌詞のような文句を避ける）

という姿勢も大事かと思えます。どうか言葉に敏感でいてください。

あとは自由に、心のままに、あなたの想いを十七音字で表現してください。

峯 裕見子

選者吟

カンバスに明るい色を選ぶ令和

青木 十九郎

令月の肘の辺りがちよつと変

重森 恒雄

足首を波が洗って現在地

峯 裕見子

